おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成31(2019)年
3月号
通巻583号
毎月23日発行
(題字　矢追日聖)

★発行日　平成31年3月23日
★発行所　大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷　大倭印刷株式会社
★定価　1部　250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替　01050-6-67002
大倭出版局
URL http://www.ohyamato.jp

奈良公園の「ルリセンチコガネ」　奈良市　井手　泉さん撮影（文・５頁）

昭和40(1965)年3月23日　月次祭法話より

極楽世界を生きる ── 心こそ自分

法主　矢追日聖（満53歳）

いちばん幸せなこと

今日は誠に暖かい良いお天気になりました。二十一日が中日で今はまだお彼岸さんの内に入っております。今朝も庭を散歩しておりましたら、いつか知らん間に梅の花も満開になり桜の芽もだいぶに膨らんで参りました。

このように草木に至るまで時機を外さない、時を忘れない。この自然の姿に、我々の人生について何か教えられることがあると思います。

大倭は神ながらの宗教だと言っております。このことは過去におられたキリストとか釈迦のような偉大な宗教家の悟り、あるいは教えによって我々が導かれて行く、そうしたものではないということです。

自然界から自然の運行によって、人生かくあらねばならないと銘々に教えられておるものが、神ながらの宗教ということです。このことをその人なりに感じ取って行く、そして一生を終える。これがいちばん幸せなことだと思うんです。

神ながらの宗教である大倭教には決めつけた教えはございません。こうした自然の中で私自身が現界と霊界とから感じ取ったこと、また実際に体験させられて来た神意を時々お話し申し上げております。

けれどそれは神ながらの全体ではありません。これらは矢追日聖を通して体得した神ながらの一部分に過ぎないのであって、神ながらはその人なりに感じ取っ

て行く問題です。私が導き手として体験を通して、参考までに皆さんに話しているだけであって、決めつけでもないし教えておるんじゃないんです。

彼岸と先祖供養

現世において我々は人間として悩みが沢山ある。仏教でこれを煩悩と言っております。そして仏さんのような悟れた心境を菩提と言っております。

煩悩の世界から川を渡って向こう岸の菩提の世界に行く。煩悩から菩提に至ることが、彼の岸に着く、即ち彼岸という意味らしいんですね。私はあんまり仏教のことは分からんですが、般若心経にもそういうことは説かれております。

また「五蘊皆空」と言って、この世の中の一切のことはみんな何もないもの、現象界の全てのものは、無いものから形ができてまた無いものに戻ってしまうのだ。だから今はいろいろな現象として見ておるけれども、煎じ詰めれば全部が空で何もない、という意味のことを観自在菩薩が悟られたと般若心経は説いております。

般若心経の最後に「ギャテイ　ギャテイ　ハラギャテイ」と原文の梵語のままで漢文に訳してないところがある。意味は「行け行け彼の岸へ行け」と分かってはおります。それを直訳してしまっては釈尊の言われる到彼岸・彼の岸へ着くという深さがない、そこでお経には原文の梵語で書いてあるそうです。

芭蕉の名句と言われる「古池や蛙飛び込む水の音」を「古池と蛙と水とドブンと音がした」と他の国の言葉に訳して並べてみても芭蕉の心境は恐らく分からない。日本語を研究し俳句を研究し初めて句の味が分かる。これと同じことで般若心経も原語のまま「ギャテイ　ギャテイ　ハラギャテイ」としております。

ところが日本では、そういう仏教の意味を季節の移り変わりに取り入れたんですね。立春の次は春分だ、いよいよ本式の春になって陽気も良くなり花も咲いてくる。世の中良くなって行くというのを菩提の悟りに例え、それまでの暗く寒い冬の気を煩悩に例え彼岸会が行われているんです。

そこへ昔からの日本のしきたりを噛み合わせて先祖さんの供養にも持っていった。お彼岸さんにお墓に参って先祖さんにお礼を言う、あるいは四天王寺で卒塔婆に戒名書いてお供養してもらうとか、先祖を思い出す行事に変わっているんです。

彼岸というのは本当言えば自分が悟る意味だけれど、今の日本では先祖さんの回向供養に重点をおいているように思うんです。

自然の中に神ながらを感じ取る

私はいつも自然の中から神ながらというものを汲み取って行くんだと申しておるんですけれども、これはなかなか分かりにくい。日常生活の中で全て体験できるんですが、ある程度年齢もいかなければ感じ取るのはちょっと難しい。

先ほどの般若心経では「これは色と見ればそれは空となり　空と見ればこれは色となる」と一切の現象界の五蘊というものは全て空になると説明しております。

私も今、ああもう大分に膨らんで来たなあと桜の芽を摘まんでおりました。けれども去年の秋や冬に桜の軸をいくら分解しても顕微鏡で見たって何もない、ただ青い汁が出るだけです。ところが四月になって参りますと、ボチボチ花の形ができているんです、そして春になるとあんなに色のついた桜の花が出てくる。もともとそんな形はないんだけど形になってくる。

無いものを空と言って、形のものを色と言っているんです。

昔のお坊さんにこんな歌があります。

「年毎に咲くや吉野の桜花　木を割りて見よ花のありかを」

簡単な和歌ではありますが、この和歌ひとつで般若心経全部が分かるはずです。

どこの宗教でもそうだと思いますが、神ながらの宗教は我々の日常生活と密接な関係があって、日々の生活の中に活かされていなければ本当の宗教とは言えないと思うんです。

こうはっきり言えるのは霊界と現界が交流してひとつになっているからです。

どういうことかと申しますと、現界の形ある人間の現在意識では全く霊界を感じてはいないのですが、自分の肉体を活かしておる生命力、ひとつのエネルギーはものすごく霊界に向かって働きかけている。現在意識では分からんものでありますが事実においてはそうなんです。

霊界にも現界と同じような社会があり、その霊の世界の動きは現界にものすごく働きかけて来ているんです。それはちょうど星と星の関係のように均衡のとれた遠心力と求心力のような働きです。

これは理屈じゃ分からんですね、分かりにくいけれど自分である程度、経験し体験を積んで、そういう働きかけを一人一人が分かってくればいいんです。

裸で生まれてきた

私は今日まで宗教関係一本で三十余年来ております。いろいろ社会の人の問題にあたって参りま

したが、煎じ詰めると人間が自分の元に戻って考えたらいいと思うんですね。

神ながらの方から見ますと、煩悩から菩提に至る彼岸の悟りということは、この世を今までの懼の土(※懼は非常な恐怖の意。浄土と逆の意味か？広説佛教用語辞典を参考に)、即ち苦の世界のような感覚から、極楽浄土のような気持ちに切り換えて行くという悟り方の問題です。

我々は元々は裸で生まれて来てるんですね。そりゃ誰でも皆知ってはいるんですが、本当に無一物で何もなしでこの世にオギャと生まれて来る。これだけ分かったら世の中というものは随分と楽になると私は思います。

私は信者さんの産婆を何回かしています、難産もありました。だからこの世に生まれて来た赤ん坊を見て分かるんですよ。

腹の中におった時には、食うことは心配いらない、体は安定してるし温度は暖かい、不平も不満も何もない、極楽浄土におる心境で十月おったと思うんです。それが産声あげてこの世に生まれて来て、娑婆の風にあたると、小さい紅葉みたいな手を震わしておるんですよ、ものすごい不安ですね。このくらい恐ろしい世の中にという格好でね、オギャというのと同時に手をブルブルと震わせておる、その姿を見た時に私は一番腹にグワーと来るんです。

子供自身は意識してないけれど、それは娑婆の風にあたった第一回のものすごい恐怖心だと思う。大人が霊動するのと同じように、無意識にそうなると思うんですね。そうした時におむつとか布とかパッと両の手に巻きつけてやるとじっと安定しよる。

人間のこの世の出発点がそれです。全てのものには原因があって結果が出る、出発はすなわち終点になる、人間のこの世の出発がそれなんだから人間は死ぬまでそれなんです。どの位自信たっぷりに偉そうなことを言うとったかて、人間の本心の中に、弱さとこの世に対しての恐怖心をものすごく持って生まれて来ておるはずなんです。

おむつ一枚、布一枚を掛けてやるとものすごく安心する。何かに頼りたい何かを掴みたい、これが人間として生まれてきた時の本当の心境だと思うんです。

ところがその心境は死ぬまで続くはずなのに、肉体が大きくなり体力もつく、腕力や知恵もついてくる。そうなってくると、生まれた時に持っておったこの世は怖いところや、何か縋れるところないかしらんという孤独感と依頼心は消え去っているんです。

だがそれは肉体の発達や知識で、本質的に持っていたものが一時影を潜めておるだけなんです。だから人間ひと皮剥いた時はものすごく弱い。人間というものは本当の孤独でたった一人、この世に生まれて来るんですから、友達、知り合い、親子そうした関係はあったとしても本質的にはみんな孤独なんです。

肉体は借り物、心こそ自分

自分の肉体そのものも、我が物と思っておれば大間違いなんです、これも借り物ですよ。

もしも肉体が自分の物であれば気持ち通りになるはずで、たとえば今病気したらつまらんという時には病気しないし、百まで生きたいと思ったら百まで生きるはずなんです。結局そうはならないんですね。嫌な時にも病気になりゃ、思わんとこで交通事故で怪我してみたり、また死ぬの嫌な時に死んでみたりね。

自分だと思っているこの肉体でさえ自由にならない。よく考えて見ると世の中において本当に自由になるというものは何もないんです。一切が束縛の中で我々は生きているんです。しかしその懼の土・苦の世界、仏教で言うところの煩悩の世界でも、自分の心だけは自分なんです。

この心の働き、いわゆる本霊（霊魂）は目には見えないけれども、生まれ持ってきた肉体を生かしておるんです。この霊魂というものが自分なんです。その霊魂はいま肉体の中に入っていますから現界におるように見えますが、本当は霊の世界の方に根を下ろしているんです。

ただ霊魂だけが自分であって、肉体は借り物で自分のものじゃないと割り切っていけば、束縛に束縛を重ねられて、がんじがらめであっても心の世界においてのみ自由なんですね。これは極楽世界でもあるんです。

現界の借り物の世界を見た時、思うようにならない懼の土・苦の世界でございますが、その裏返しで自分の肉体に入っておる霊の世界というものを見た場合には極楽浄土がこの世にもあり、菩提・悟りのいわゆる神さんの世界・仏の世界があるはずなんです。私はそういうような極楽世界で今日まで生きてきているんです。

私は物に対して苦にしないんですね。裸で生まれて来たんやから、そして借り物の肉体に宿ったんですから屈託ないんです。

自分というものの本質は霊界にあって現界におるんじゃないんです。この肉体は百まで滅多に続きません、これから四十年も持たない、そうすれば元の古巣へ私は帰って行くんです。皆さん方もその点は同じで、この娑婆世界で肉体の生きておる間だけ霊魂が仕事して動いておるんです。

こんなことを言うと若いもんに対してはすまな

いんだけど、死ぬのが分かっておるんやから、僅か五十年、八十年の人生で、えらい名誉やとか巨大な富を欲しいとか、欲を持てば持つほど苦しみはついて回るはずなんです。そんな気持ちさえなければ人生の苦はないと私は思います。

死ぬことを実感する

私はぶっきらぼうのね、案外苦の無い世渡りをして参りました。私は人が苦になることが苦にならない、というのは生まれた以上は死ぬんだということを知っているからです。

裸でオギャと生まれて六十か七十か、よう長生きさせてもらって八十歳まで、その先は娑婆世界とおさらばして元の古巣へ帰るんだと実感として分かっておればね、私みたいにぼやけたアホになれるんです。

このぼやけたアホで今日まできておりますが、家庭も持ち子供も持ちして世間並みのことも一応やってきてますから、世間の人たちの苦痛、楽しみ、生活百般のいろいろを分かっております、それが為にいろんな相談にのってます。私のような抜けた者も世の中におることはこりゃ必要なんですね。

ただ自分では意識してませんが、人の気に障ることはお構いなしで言うておるようです。

そこは許して欲しいと思うんですが、私はいかなる人と話したり相談を受けたりする場合でも、この人が現在よりも少しでも喜びの心を持ってくれたらいい、幸せになってくれたら結構だとそれ以外にないんです。

えらい金も持ちたいと思いませんし、名誉も欲しくありません。大倭の教祖さんなんて言うてもらい御簾（みす）のうちらへ入ることは大嫌い。この世の中に生まれてきて受け持ってきたお役目さえ果たさせてもらえば、満足して喜んでまた霊界に自分は帰れる。

過去世からの深い縁

ところが霊界より現界のほうが有難いんです。

霊界というのは現界よりも辛いことが多いんです。現界の人間界に出されるのは非常な幸せなんです。皆さんが幸せなこの娑婆世界に生まれて来て、こうしてお互いに顔を見合わせ、話をし合う、これは前の世あるいはもうひとつ前の世と何回か輪廻転生しておる中で深い縁のある者だけが寄り集まることができる。無縁の者・縁の無い者は絶対に集まることはできないんです。

初めて会う方も古くから来られている方も、深い過去世からの縁がある。切っても切れない絆をお互い持っている者が身近に集まって来るのだから、私はあの人は嫌いやこの人は好きやという感情はあまり持っていないんです。

そりゃこの人はこう言うてやれば為になると思えばきつい言葉も出しますが、心の中では相手に対して大乗的な愛情の発露の気持ちでものを言っている場合が多いんです。

私もてきぱき言うことが多いので、感情で聞かれた場合には意味を誤解して、あの矢追日聖ちゅうやつはけしからんと言うような人も今日までたくさんございます。けれども私の方は別にそれは気にしていないんです。だからして皆さんもこうして寄り集まってくる。

互いの孤独を理解し合う

あじさい邑で一緒に仕事をする者、大倭教の信者として来る者は、みんな何代か前から深い深い人間関係を持って集まっているはずなんです。

先ほども申しましたように、人間一人一人を切り離した場合、非常に孤独な寂しさを持っておる。みんな別々の孤独の寂しさ弱さで、何か絶対的なものに縋りたいという人間の本質を持ちながら縁のある者が集まってくる、そこに団体やひとつの結びつきが出来てくるんです。

そうした過去世から現世における、人間対人間の結びつきによってお互いの孤独感、寂しさが相互扶助の気持ちになって持ちつ持たれつ、遠心力と求心力のように、力になりまた力にもならしてもらう。周囲には自分の弱いところを補ってくれるような人もおるはずなんです。

この世の中みんなが助けおうて自分の一生を全うするところに、集団としての人間の生きる意味がある。これは共同生活をしている者だけやなしに、大倭を中心として集まって来られる一般の方々も同じことだと思う。

孤立したら絶対行かれない世の中なんです。

心の中の孤独感、寂しさを互いに理解しおうて自分もそうなら他人もそうだと。同じ短いこの浮世のことなんだから、みんなが喜びを持って力強く、持って生まれた命（みこと）を現世において全うして行こう。その生き方が大倭で言う神ながらの宗教的対処で、本当の実践だと思うんです。これは修行（ぎょう）であり行だと私は思う。

自分も他人も一丸として、みんなが仲良く暮らして行ける世の中になるように、まず自分がなって行かなければ傍（はた）もならないんです。

社会の一員として人格者である自分を創り上げていく心境で、信仰というものは続けてくれれば結構だと思います。

（文責・編集部）」

表紙写真によせて

奈良市　井手　泉

『おおやまと』編集部より久しぶりに連絡があり、「三月号でルリセンチコガネの紹介記事を書いてほしい。表紙にはこの写真を使いたい」と要望がありましたので、シーズンとして少し早いかもしれませんが、編集の都合にあわせて引き受けることにしました。

ところで、奈良は名所旧跡だけでなく、奈良公園には千二百頭をこえる鹿がいて、一日一トンの糞（フン）をし、そのフンを食べて掃除をしてくれている糞虫（フンチュウ）たちのメッカとしても有名です。昨年、国内では初めての糞虫館「ならまち糞虫館」が新設されたことはご存知のことと思いますが、その館長の中村圭一さんによると、全国で百六十種類の糞虫が確認されていて、そのうち約六十種類が奈良に生息しているとのこと。

そこで、奈良県にいる糞虫の中では最も大形の部類に属し、国内で格別に珍重されている瑠璃色（ルリイロ）に輝くオオセンチコガネ「ルリセンチコガネ」にピントを合わせて紹介します。なお分類によると糞虫はコガネムシの仲間で、大きく分けて、カナブンやカブトムシなど植物質のものを食べるものと、動物のフンを食べるものに分けられ、オオセンチコガネ（ルリセンチコガネ）は後者です。

さて、私が初めてオオセンチコガネに出合ったのは、今より八十年あまり昔の子供の時で、当時は長崎市内に居ましたので、近くの丘の雪隠（セッチン）（人や牛馬のフンを溜めておく肥やし溜め）のほとりでした。オオセンチコガネが食事中のところに人が近付いたので、驚いて飛び立ったのでしょう、「ズイイーン」と羽音をたてて、赤紫色や赤銅色の混じり合った金属光沢を輝かせて飛ぶ、オオセンチコガネとの初対面です。とにかく強烈なインパクトがありました。そのためか体長一・五センチあまりの虫が、大きなカブトムシぐらいの大きさに見えた記憶があります。強い衝撃で幻覚が起きたのでしょう。そのあと、低く旋回飛行しながら元の雪隠のフンの近くで着地しました（ついでながら、オオセンチコガネのセ・・・チはセッチンの訛りです）。

あれから八十年あまりが経ち、今度は奈良の春日大社境内地での出合いがありました。ぜひとも会いたい虫だったので、その時の情景は、今も生き生きと甦（よみがえ）って来ます。

オオセンチコガネの体色変異の一つであるルリセンチコガネとの初対面です。美しく照り光り、きらめきながら輝く瑠璃色の金属光沢、ごくわずかに光の向きが変わるだけで千変万化する体色に圧倒されました。

手にとって見てさらにビックリ、われを忘れ、時のたつのも忘れて天国をさまよいました。この別世界は、まさに筆舌につくしがたく、この紙面の写真でも表現できません。筆者の伝えたい意味と意義を何とぞご賢察下さい。

ところで、ルリセンチコガネの瑠璃色とは、そもそも紫色をおびた青い宝石の色で、黄色をおびた青い色は翠玉（スイギョク）という宝石の色を指します。春日山のグループでも稀に翠（ミドリ）っぽい個体が見られ、光の状況によってもミドリをおびることがあります。また、ある時は紅玉（コウギョク）という宝石の紅色（ベニ）が、体色の一部に滲（にじ）んでいる感じに見えることもあります。（写真参照）

このように糞虫を宝石に見たてて楽しんでいますが、これは苦しみや悩みの種になる煩悩ではなく、官能の快楽に耽溺（たんでき）しているのでもありません。それは虫たちのいのちと自分のいのちとが一体となって響き合う、無垢（むく）の生命の喜びそのものです。それは多くの人々が満開の桜を愛でて喜びにひたっている心持や、小高い丘から海を眺めて静かに安らいでいる気持と同じだろうと思います。対象が異なっているだけで、私としては大自然からの祝福のプレゼントとして、かたじけなく頂いています。

その他にも糞虫の「生態」に大きな魅力がありますが、今回は割愛し、オオセンチコガネの「形態変異」の一つである、体色変異の紹介となったことをご容赦下さい。（続く）

＊

続けてもう少し、井手さんの生きものに対する日頃の思いを書いて下さったのですが、締め切りと分量という編集の都合によって今月は見送ることにして、その部分は5月号に掲載の予定です。

（編集部）

風ぐるま

大倭にご縁をいただいて

神奈川県藤沢市
伊藤裕司

はじまりは30人ほどのツアーにて。シャーマンの神人さんご夫妻、野草社の石垣さんご夫妻たちとのツアーで、２０１７年10月、大倭神宮での月次祭に参加させていただきました。とても印象に残ったのは、教長さんやみなさまの排他でない、迎え入れてくれる雰囲気と共に、紫陽花邑拝殿裏の磐座１つ１つが生きているということ、そして、大倭神宮の磐座とその上空空間の、途方もなくただならぬところらしい、ということでした。

また、実家が奈良県にあり現在も両親が住んでおり、小さい頃からよく知っている場所をいくつも通過して行くので、不思議な縁というか、思わず笑ってしまう気分でいました。

月刊の『おおやまと』も数ヶ月分いただき、何か大事なことを書いているな、と感じていました。また、石垣さんから『自然生活』１９９７年第11集「矢追日聖さんありがとう」の号をいただき、大倭神宮に関する歴史など、日本の古代史の流れが見えてくる大切な視点と出会えたように思っていました。

それからしばらく時が経って、『おおやまと』の過去発行分がインターネットのホームページで見れる（約17年分！）ということを発見し、古い時代のものから順に読み始めました。法主さんの話にふむふむとうなずくところ多々で、こういう考え方に出会いたかったんだなあと思うと同時に、野本三吉さんの沖縄の話、交流の家のはじまりの話、高倉敦子さんの水俣の話等々、縁ある方々の話もとても濃いものが多いと感じていました。

そうしている内に、新しい動きも知りたいな、と思うようになり、２０１８年12月の初め頃にホームページを見て、最新号として出ていた２０１８年10月号をダウンロードしてみると、何と！ＢＯＯさん（横井英夫さん）のろうけつ染めの絵がトップに出ていたのです。ＢＯＯさんのろうけつ染めの絵は、２０１３年秋頃に照美さんから一点、ゆずっていただき、ずっと自宅に飾っていて、生前お会いしたことはないのですが何か縁がある気がして、しかし今生どんな縁があるのかずっと分からずにいたのです。ここで再び出会うとは！とても驚き、初めて直接電話して月刊の『おおやまと』を送っていただくようにお願いしました。

そんな流れだったのですが、今年２月９日の法主帰幽祭に初めて一人で参加させていただき、その後、杉本さんといろいろお話させていただき、「大倭のいいところだけやなく、悪いところもみんといかんで」とわざわざ言って下さるのをありがたく思いました。

ついでに、ちょうど翌日に禊会があることをお伺いし、特にその後の予定も決めていなかったので、そのまま大倭会館に宿泊させていただいて初参加させていただきました。ここに言葉で簡単に表現してしまうと、何か違うものになってしまいそうな、場の流れを感じさせていただいたように思います。

大倭神宮も、紫陽花邑の「東方瑞祥の碑」の場所も、大切な場所なのだなという思いを訪れるたびに深くしています。

地球への感謝の思いがそのまま伝わっていくところ。

エネルギーの深く深く素なるところまで、限りなくこまやかで限りなくうれしいままで、そのまま伝わっていくところ。

その場に在れることが、限りなくうれしいところ。

どのようなおはからいでご縁をいただき、これからどんな流れになっていくのかは存じませんが、ご縁をいただいていることに感謝いたします。今後ともよろしくお願いいたします。

平成31(2019)年 大倭会行事のお知らせ

禊　会　毎月第２日曜日

文化行事

第341回　４月21日(日)／手向山八幡宮、二月堂へ

第342回　５月19日(日)／叡福寺に聖徳太子磯長御廟をお訪ねする

第343回　６月16日(日)／京都下賀茂神社と高麗美術館

第344回　10月27日(日)・28日(月)／　未定　ご提案があればどうぞ

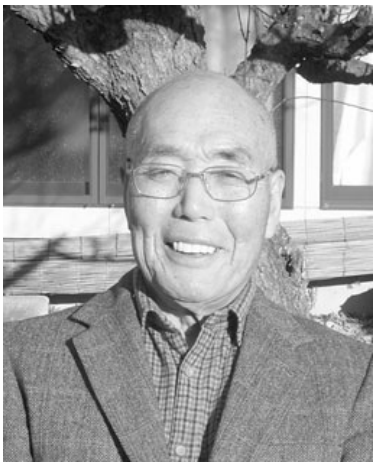
文化講演会　11月17日(日)／　気功を語る（仮題）
講師：鵜沼宏樹　氏

＊大倭会へのお誘い　年会費１万円＊
郵便振替　：０１０６０－６－３１７０５

寸莎

第136回

中村　孝明さん



登美之郷だより

「新皇教宮の関係者の方を」という思いがけないお話を頂き、今回は筆者の伯父をご紹介したいと思う。

元日の新皇教宮は、凛とした中にもうっすらと初春の光が温もりを感じさせていた。この日、掃き清められた庭は、すっかり腰の弱くなった伯父の手によるものだ。伯父は中村孝明と言い今年で八十歳を迎える。

新皇教宮は群馬県安中市原市に所在する。平安時代の武将、平将門公終焉の場所と言われ、法主様から、「将玄坊大善神」の名前を頂いた霊人の棲息する霊地である。代々中村家は、この霊地の上で生活を送っていた。

伯父はこの地で、父・文太郎と母清（キヨ）の長男として昭和十四年一月二十六日に生まれた。同年には第二次世界大戦が開始されている。

伯父は唯一の男子で、『孝明』の名前に込めた両親の想いが滲んでいる。五歳頃に肺炎を患い、医師は首を横に振ったが、母は必至に塩湯で煮た布の湿布で手当てをし、曾祖父も地蔵堂に願掛けをして一命を取り留めたという。姉妹は四人で、姉（馬場）、妹に次女（石川）・三女（杉藤）・四女（桜井・筆者の母）がいる。

中村家は、大通流？と呼ぶ社殿があったり、先祖には修験者がいたり、風変わりな所があった。また、子供の頃、家には刀が束ねる程あり、鞘入りの刀が五、六本あったが、警察に没収され、残った小刀を鉛筆削りにした。さらには、「ちゃんばらごっこに脇差を持ち出して叱られ、蔵に入れられた。丁度いい代物に思った」と気楽に笑う。また、「なぜ、家にはこんな物があるのか、不思議だった」と当時を振り返る。未だに中村家の謎の一部である。

生家は養蚕中心の農家で、周辺は同業者も多かった。「当時は全体的に貧しかったが、自ら命を絶つ者はいなかったなあ。皆生きるのに懸命だった」と言う。物は充分になくとも、人の心は穏やかであったようだ。中学生からは、野良仕事や養蚕の手伝いをして家業を助けた。農家の大変さを理解していたこと、同時期に、化学繊維の台頭で養蚕業が衰退してきたこともあり、高校卒業後は工業関係の会社での仕事に就いた。

結婚後に前橋へ移り、三十代で内装の自営業を始めた。建築の増加に伴い仕事が追い着かない程で、まさに時代の波に乗るようだった。

一方、四十二歳からは、肝炎やヘルニアの手術等で、九回の入退院を繰り返した。「働き盛りでの入退院は、お客を手放すことになり厳しかった。自分がこれから奮起しようとする時に必ず体に起こる。命を取られる事がなかったので、守られているようには思った」

また、二人の子供の内、長男には生後、耳の奇形と難聴があった。縋るように慈恵医大に通ったが、現代の医学では困難だと言われた。「子供にも責められたが、言葉に出来ない親としての辛さや負い目がある。只、今ではその長男も、二人の子供の良き親になって安堵している」と苦脳の胸の内を語る。

母・清が六十九歳の時、脳梗塞で倒れた。二年後の昭和六十二年に初めて大倭を訪れ、法主さんにお会いした。「にこやかに迎えてくれて、『先祖に願い事をするのでなく、心を寄せて下さい』と話されたことは、今でもよく覚えている」と言う。

父・文太郎の一人暮らしは十数年にも及んだ。六十五歳で仕事を辞め、父の晩年は実家で一緒に生活をした。「親不孝をしてきてしまったが、父との生活を支えることが出来て良かった。それが出来なければ悔いが残る気がした」と噛み締める。

妹（筆者の母）によれば、父はある時、「将玄坊様が眠る場所の上で生活するのは申し訳ない。これからは蔵で生活しようと思う」と言って、古い蔵の床を拭いていたという。

九十歳の寿命を迎える最期まで霊地を守り、案じる父の姿があった。

正月を迎える度、『松飾り冥土の旅の一里塚』という一休禅師の句を実感するようになった。法主さんが教示してくれたように、実家の霊地を永久に保存することが肝要だと考えている。関係者が年老いてきている現実がある中、霊地を守る為にどんな進め方をしたらよいかと、思いを巡らす今日この頃である。

（聞き手＝内田誓子）

あじさい日誌

2月15日　大倭神宮月次祭。

2月16日　午後、交流の家でFIWC定例委員会。

2月23日　午後1時20分、大倭神宮で申孝祭の祭典が行われ、続いて紫陽花邑に戻り、2時から月次祭が開かれました。千葉県船橋市の遠藤浩子さん、静岡県磐田市の磯部将紀さんが奥さん・2人の子供さんと参加。

この日お聞きしたのは昭和37年2月23日の法話で、平成17年3月号『おおやまと』に「申孝祭の精神を汲んでほしい」として掲載分。

3月6日　大倭神宮月次祭。

夜7時から大倭会館において邑倭の会が開かれました。

3月10日　禊会。3時頃から坂下貴陽さん（岐阜市）が初参加。天理教や大倭神宮を訪ねてきた由。神宮で3月号『おおやまと』を見付けて紫陽花邑に寄り、偶然禊会だったと。日本の文化や歴史の本当のところを知りたいと色々勉強しておられるとか。

3月11日　大倭会会員の大沼安史さん（岩手県奥州市）より来信。「2011年以来、書き継いで来ました『世界が見た福島原発災害』の最新、第7巻、「ニッポン原子力帝国」が刊行されました」（発行所：緑風出版）と、自著を送ってこられました。帯には「本書は、海外メディアが伝える…（略）…恐るべき現実。日本のメディアが絶対に伝えない真実を明らかにする第7弾！」とあります。

第341回大倭会文化行事

新緑の手向山（たむけやま）八幡宮へ

日にち　平成31年4月21日(日) 雨天決行

集　合　近鉄奈良駅・行基像前に、午前10時

※手向山八幡宮社殿前直行でもOK。

10時半頃に合流する。

行　程　手向山八幡宮⇒二月堂⇒万葉植物園

※歩きやすい服装でどうぞ。

昼食はお店で。

連　絡　林修三　080-2527-0840

拝殿の前あたり、法主様が牛を繋いでいたという松の切り株

矢迫房子さん写

大倭安宿苑では

（菅原園）

2月10日　会議室を映画館にセットして「ズートピア」上映。

（須加宮寮）

2月14日　昼食時、ホットプレートでアツアツのやきそば。

（長曽根寮）

2月20日（デイ）　手作りのひな壇を制作し持ち帰りました。

2月23日（特養）　喫茶倶楽部あじさいで、歌と季節のお菓子。

（茂毛路園）

2月13日　書道クラブ。文字は「雲合星敷」「寒浅春遅」です。

（八重垣園）

3月9日　記念撮影をして、お雛様の片づけをしました。

こだまことだま

埼玉県入間郡　**菅井勇紀**

こちらは今年もアカガエルの声が聞こえる今日この頃で、ずいぶん春めいてきました。

毎月『おおやまと』がくるとうれしくなります。僕は矢迫日聖さんにお会いしたことがありませんが、矢迫さんの新聞の言葉、お話が、とても自然に入ってきて、同感覚を多々感じて、なんとも聞き入って、読み入っています。（平成30年1月号「風ぐるま」筆者。ゆう琴という創作楽器を作り演奏する）

あんない

＊月次祭（大倭神宮）

4月6日(土)　午後2時より大倭神宮にて。

＊須佐緒（すさのお）祭（大本宮）

4月8日(月)　午前11時より大倭大本宮拝殿において祭典を行い正午より各自持参の弁当などで園遊会を行います。

須佐緒祭とは、宇宙万物一切の顕幽両面における一体のもとたる須佐（すさ）（結び）の緒に感謝をするお祭りです。

＊大倭会主催第603回禊会

4月14日(日)　午後2時から大倭大本宮拝殿にて。

＊箭負（やおい）祭（大倭神宮）

4月15日(月)　午後2時より大倭神宮にて。

箭負祭とは、皇祖天神（おやてんじん）の鎮ります登美の神奈備（大倭神宮）の霊威を法主日聖大恩師の遠祖（箭負氏）が代々祭祀し、神仕えしてきたことを記念するお祭りです。

＊月次祭（大本宮）

4月23日(火)　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

編集後記

▼法話が『おおやまと』に掲載されるまでには、「これがほんまの写経やで！」という誘い文句で、実に多くの方に協力して頂いてます。まず文字に起こし、そこから整理してまとめるのですが、法主様は「話し言葉は、書き言葉とはちがう。読んで分かりやすいようにしてほしい」とだけ言われました。

▼世の中から録音テープや関連の機械が消え、デジタル化せざるを得なくなった時、青山法義さんと齋藤正宏さんとで、編集部にIT部とでもいう動きが始まりました。

▼4月号の見田暎子さん追悼特集を編集中、齋藤正宏さんの原稿には分量の都合で載せきれない部分がありましたが、ここで記録とさせて頂くことにしました。「法主さんの法話テープをデジタル録音する仕事があります。法主さんのご存命中の法話ですから、初期のものは今から70年以上前の代物です。テープ自体が劣化の限界を迎えており、このままでは法主さんが肉声で遺されたメッセージが聞けなくなってしまうと、コンピュータによる録音を始めることになったのですが、これには私自身の興味もさることながら、暎子さんには、常に激励とご支援を頂きました」（春）